

こんなときどうする？

数学授業コーチング

愛知県刈谷市立刈谷南中学校 神谷 和宏

8 落ち着きと深い思考が生まれる教師の伝え方

私たちの身の回りには、とても早口の教師が多いことに驚かれることはないでしょうか？ 教師は、教えたいたが多いため、どうしても話す内容も多くなり、早口になってしまうことがよくあります。しかし、私たちは、話した内容がすべて子どもに伝わっているわけではないことを知っています。本来は、教師が一方向的に話すのではなく、言葉数は少なくとも、それがしっかり伝わることを望ましいわけです。

そこで、今回は、コーチングをベースにした伝え方（話し方）を考えていくことにします。

1 子どもの関心のある事柄から授業を展開する

話し方のうまさでは有名なオバマ大統領の演説を聞いたことがありますか？ 彼の演説は「我々は…」で始まることが多いことに気がきます。まず彼は、すべての国民が関心をもっていることを導入に使い、聴衆を引きつけるようにします。

数学の授業でも同じことが言えます。授業のスタートに、子どもが直面している状況を明らかにしてスタートしたいものです。子どもがその話と同調して、うなずくのを見たら、子どもの念頭にある問題や課題の説明に移ります。教師の立場ではなく、子どもの立場からスタートするのです。

2 単純にする

簡単で覚えやすいキーワードで授業全体を統一します。例えば、分配法則を学習する場面では、「まとめて」「別々に」という単純なキーワードを使うと有効です。

$$3(x+8) = 3 \times x + 3 \times 8$$

$x+8$ が まとめて3つある 別々に3つある

まず、教師が核となるキーワードを決定します。この核となるキーワードの決定には、深い教材研究が必要です。そして、いったんキーワードを決定したら、授業中それ以外の議論はできるだけ自然に取り除いていきます。授業は有限時間の中で行うものなので、1秒でも早く核心に迫るのは重要なことなのです。

また、完璧に筋道の通った論理と、子どもが納得して理解できる論理とは違うということも理解しなければなりません。どんなに優秀な子どもでも、集中できる時間は限られており、授業で扱われた情報の詳細を覚えておく能力も限られています。ですから、細かい情報を盛り込まないことを恐れる必要はありません。情報は選択する必要があるのです。完璧で詳細な論理でも、子どもに届かなければ意味がありません。

3 「間」のとり方を学ぶ

傍から見ていて感心する話し手は、間違いなく「間」のとり方の名人です。このような話し手は、話していることに聴衆がついてこられるよう、間をとっています。「間」をとる理由として、以下の3点があげられます。

- (1)言葉の内容を消化してもらうため
- (2)聞き手を休ませるため
- (3)落ち着きと思慮深さを演出するため

「間」のとり方のコツは、「息つき」「句読点」などで、子どもが頭の中で復唱できるくらい（同じ長さの時間）の「間」をとって、待つということです。

例えば、以下の問題文を読み上げる場面で、「間」をとる位置に／を入れてみます。

右の図で/直線 l 上に/点 P をとって
/ $AP + BP$ の/長さを/最も短くした
い。/このような/点 P を/作図によっ
て/求めなさい。



どこで間をとるかに厳密なルールは存在しませんが、一度試してみてください。すべての箇所で、ゆっくり3秒程度息を吸って、時間がたっぷりあるかのように話すのです。

4 喫茶店トーク

授業では、普通「全員に向かって話している」という前提で話をしていますが、「一人に向かって話している」ような感覚で、まるで喫茶店で話しているかのように話す方法を、喫茶店トークと言います。

このときは、ターゲットになる子どもを決めて、その子どもとペーシングしながら話をします。いつも、その子どもの様子を見て、その子どもの理解度を把握しながら話をします。

5 ペーシング

ペーシングとは、「ペースを合わせる」ということです。ミラーリングとも言います。具体的には、主に以下のようなことが考えられます。

- 1 視線を合わせる（相手の目の高さに合わせる）
- 2 話のペースを合わせる（リズム、速さ、トーン）
- 3 表情、感情を合わせる
- 4 相手の言葉を復唱する
- 5 価値観、考え方、意識レベルを合わせる

例えば、子どもが笑顔で意見を言っているときは、教師も笑顔で受け止め

てあげる。子どもがゆっくり悩みながら意見を言っているときは、教師もゆっくり考えながら、受け止めてあげるようにします。また、指先や目の動きなども同じようにできると、さらにペーシングの効果は高まります。

6 教師らしいボディランゲージ

ALTの行う英語の授業を参観すると、その動きに驚かせられることがあります。ボディランゲージの巧みさです。言葉が通じなくても、ボディランゲージで意思疎通できることに感心します。数学の授業においても、ボディランゲージで伝わること（伝わりやすくなること）があるようです。

例えば、登場人物が二人出てくる内容を教師一人が説明しなければならない（一人二役を演じる）場面では、Aさんを表現するときは子どもに対して右向きになり、Bさんを表現するときは左向きになります。声を変えるときらによいでしょう。また、内容に、「過去」「現在」「未来」などが存在するときには、直線的に「過去の位置」「現在の位置」「未来の位置」を決めて、その間を移動しながら話をするとよいでしょう。さらに、私の場合、感情を表すときは両手を大きく広げたり、決意を表すときにはこぶしをつくり前に突き出したりするようなボディランゲージを使います。

効果的なボディランゲージを見せるには、ある程度の練習も必要です。一日に1つだけの特徴（例えば、元気のよさなど）に焦点を当て、それを起床から帰宅までの間、子どもや同僚へのあいさつをなど、日常の基本的な動作の中で練習することが必要です。アメリカのある研究によれば、1つの言葉に集中することが、新しいふるまい方を身に付ける上で最も効果的な方法なのだそうです。練習を始めたときは不自然に感じるかもしれませんが、すぐに自然なものになり、言葉数が少なくても気持ちが伝わるようになります。その結果、授業においても、子どもに内容やそのときの感情が伝わりやすくなります。

<参考文献>

・神谷和宏『図解 先生のためのコーチングハンドブック』（明治図書）